

# 環境福祉学会

## News Letter

ニュースレター ● January 2005

# 1

### 目次

会長挨拶 江草 安彦 .....	1
研究会開催の案内 .....	2
設立総会概要 .....	3
基調講演 炭谷 茂 .....	4~6
理事コメント(第1回) .....	7~8
藤田 八輝/児玉 剛則/寺田 清美	
小池 大哲/波田 幸夫	
役員一覧 .....	8

環境福祉学会 本部	東京都港区南麻布5-16-6 コウセイ広尾3F 創造学園大学 東京本部内 TEL.03-3447-3680 FAX.03-3447-3681
事務局	東京都新宿区四谷3-1-3 第1富澤ビル 株式会社 環境新聞社 事業部内 TEL.03-3359-7039 FAX.03-3359-7250

## 年頭のごあいさつ

### 環境福祉学会会長 江草 安彦

(旭川荘理事長/川崎医療福祉大学名誉学長)

あけましておめでとうございます。

9月に設立致しました環境福祉学会に対するご理解・ご協力に心より御礼申し上げます。

私はもともと小児科医です。子どもを含めて障害者や高齢者など人間の生活にかかわる福祉サービスに長年携わってきました。その中で、環境条件が障害者や高齢者の生活に大きな影響を与えることに気付き、環境の教育力あるいは治療力などについて考えるようになりました。現在のわが国においては、欧米文明の浸透などもあり日本の文化、自然、環境が省みられることが少なく汚染された環境が、身体的な健康問題のみならず文化的環境あるいは社会的な健康に大きく影響していることが憂慮されるまでになりました。地球温暖化が進み、自然環境が荒廃し、新しい病気、障害等があちこちにてているのが現状です。

このような状況の中で環境福祉学会が、環



境問題と人間の暮らしを支える福祉関係の関係性を有効に捕らえ、理論的研究を推し進めることをめざして設立されたことは大変意義が大きいと思います。「環境&福祉」学会や「環境・福祉」学会であるならば、従来の福祉学と環境学の連携であり、あくまでお互いがお互いである事を主張する関係に過ぎません。いままでのこの種の学際的な学会ではそうした連携だけでした。本学会の場合はそうではなく、環境と福祉の融合という点に大きな意味があると思います。

福祉というのはウェルビーイングであり、よく生きることです。そのためには、何が要るのか、人間にとって環境は何を意味するのかを本質的に捕らえ、そして対応を考えていくことは大変すばらしいことだと思います。そして、環境と福祉の融合により、人間らしい人間の暮らしがでてくるのではないかと考えています。

環境福祉学という学問領域の議論はまだ始まったばかりですが、環境、福祉はもとより、医療、経済、教育、芸術等幅広い分野の専門家の方々にご参加頂いておますので、関係者皆様方の努力を集結し、その確立を図っていきたく思います。



●環境福祉学会●  
設立総会概要

環境福祉学会の設立総会が、昨年9月26日に東京都内のホテルはあといん乃木坂において、出席者133名で開催された。(1/20現在、会員数274名)

まず、本会の呼びかけ人を代表して江草安彦氏(旭川荘理事長/川崎医療大学名誉学長)があいさつし、「この学会は、生活全般にわたる大きなテーマの環境問題と人間の暮らしを支える福祉関係の関係性を有効に捕まえ、理論的研究を推し進めることが狙い。今日の我が国の混迷に対する批判であり新しい文明創造のための蓄積となればありがたい」と述べた。

その後、仮議長に鴨下重彦氏(賛育会病院院長/東京大学名誉教授)が選出され、議事を執り行い、最初に設立準備経過説明が、準備委員会代表の炭谷茂氏(写真右:環境事務次官)より、設立準備経過説明があった。



続いて議案の審議が行われ、学会会則案については、準備委員会委員の松寿庶氏より説明があり、異議なく原案通り可決した。役員選任については、仮議長より9/9の準備委員会で江草会長をはじめとする役員案をまとめたが、これについてその承認を求め、原案通り可決した。

設立総会に続いて、アドバイザーの炭谷茂環境事務次官が、「環境福祉学への期待」と題する基調講演を行った。(4・5・6頁参照)

引き続き、「次代を担う環境福祉学の展開」をテ

ーマにパネルディスカッションが行われた。パネリストの江口隆一水俣市長がエコポリス水俣構想について講演、みなまた環境テクノセンターにおける関連技術開発や、薬草園を中心とした医療福祉施設、健康増進施設、温泉、環境配慮型農業等とのネットワークづくりを始めとする多彩な取り組みなどを紹介した。

また、児玉剛則環境創造研究センター専務理事が、CSRにおける障害者雇用の重要性を強調、環境と福祉を繋ぐモデル事業として、脱温暖化対策のCDMを創設して障害者を雇用する『環境雇用』のスキームを提案した。次に、安川緑旭川医科大学医学部看護学科講師が園芸療法について講演、植物の持つ特性を活用した補完・代替医療として、その効果を示唆する医学的データなどを紹介し注目された。

このあと、コーディネーターの小池大哲創造学園大学学長及びコメンテーターとして江草氏、炭谷氏、藤田氏が加わり、パネルディスカッション(写真下)が行われ、芸術と福祉、国際環境協力を含む幅広い分野について活発な議論が行われた。



最後に、伊藤達雄名古屋産業大学学長が閉会のあいさつをし、全てのプログラムを終了した。

## 「環境福祉学会への期待」

環境福祉学会アドバイザー（環境事務次官）  
炭谷 茂

今回の環境福祉学会におきまして、私自身、役員ではありませんが、アドバイザーという職を仰せつかりました。そういう意味で環境福祉学会にどういふことを期待したいのかということについて、私の考え方を少し披露させていただき、皆様方のご意見をいただければ大変ありがたいと思います。

環境と福祉ということについての私の考え方というのは、大げさに言えば自分の人生経験、主に公務員生活の中から学んできたものから得たものです。ご案内のように昭和30年代、40年代というのは、公害問題が顕在化し始めた時期ではないかと思えます。また日本も福祉国家を目指して歩き始めたのが30年代、40年代だったと思います。

30年代後期から高度成長が始まりました。それは日本の社会を発展させる大きな原動力になった反面、公害問題が発生いたしました。その公害問題について真っ先に声を上げたのは市町村で活動する福祉関係者です。

今日もその関係者の方が何人かいらっしゃいますが、社会福祉協議会の方々が、自分たちの組織の中に公害問題を考える部署をつくって対応したのが30年代、40年代の歩みだったわけです。ですから昭和30年代、40年代というのは、福祉と環境というものを意識しないで、自然と一緒に考えていられたと私は思います。

私は、昭和44年に旧厚生省に入りました。そのときに入った部署が公害問題を扱う部署でした。そのときは旧厚生省の中に公害問題がありましたから、公害問題に対するアプローチも、福祉的な関係が大変深かったのではないかと思います。昭和45年にいわゆる公害国会がありました。あのときは大変熱気にあふれていたと思います。そしてその後、昭和46年に環境庁が発足いたしました。次の年の昭和47年に、ローマクラブから、「地球はこのままいくと大変なことになる」という提言がなされたというのは皆様方にご案内のとおりです。そして公害問題から環境問題へというかたちで、問題がどんどん発展していきます。

そうすると、どうも環境問題が非常に広いものになる。また地球全体のものになっていけばいくほど、身近にある福祉問題とは離れてきたというのが、昭和50年代以降の動向ではなかったのかと思います。1992年にリオ地球サミットが行われました。環境問題は、地球という大きな問題を扱うかたちになって、ますます専門化、高度化していきます。役所の組織も「環境庁」と、福祉を扱う厚生省から分化した結果、両者の関係はだんだん希薄になったのではないかと考えています。

平成13年に環境省がスタートいたしました。幸い私は環境省のスタートのときに、再び公害問題、環境問題を扱う環境省に異動しました。平成12年末までは福祉の問題をずっと長くやってきました。平成13年の1月から環境問題に移ったときに、環境と福祉との距離が大変遠くなっていると本当に実感いたしました。しかし、福祉問題にどっぷりつかってきた目から見ると、環境問題というのは大変福祉と関連が深いということに気づきました。

今日もパネルディスカッションで水俣市長の江口さんにお話ししていただきますが、水俣市を訪れたとき、私は環境と福祉とい

うのは、実際は本当に結びついているなということ歩きながら感じたわけです。水俣の原因というのはもちろんチツソが原因ですが、水俣病が深刻化した原因の一つには、社会的な問題もありました。そして貧困という問題が関連していたということ、直視せざるを得なかったと思います。環境と福祉とを一緒に考えてこそ、本当に問題は解決するのではないかと思ったわけです。

また続いて2002年に、リオサミットに続いてヨハネスブルグサミットが開かれました。ヨハネスブルグサミットの最大のテーマは、貧困と環境という問題でした。ヨハネスブルグサミットには世界で一番たくさんの方が日本から出かけました。しかし日本人の中には、本当に環境と貧困の関係というものをきちりと理解した人が何人いたかと、疑問を持たざるを得ない場面がありました。

全国紙の中には、なぜ貧困を扱うのか疑問に感じる日本からの参加者もいたということが報道されていました。しかし私には環境問題と貧困問題という福祉というものは、まさに密接な関係があると思います。それがヨハネスブルグサミットでしっかり論じられたという点では、大変嬉しく思ったわけです。

そのようなことから、環境と福祉というものをしっかりとらえてこそ、環境問題も解決する、また福祉というものも解決すると思えました。このような理解は途上国だけではなく、ヨハネスブルグサミットで申せば、ヨーロッパの諸国も当然の前提として考えている。しかし日本でこのことを本当に理解して帰った人は、比較的少なかったのではないかと思います。そのような私自身の、大げさに言えば自分の人生の悩みの中から、環境と福祉と一緒に考えてみたいと思立ったわけです。

それでは環境福祉学会にどういふことを期待しているのかについて、私の考え方を述べさせていただきたいと思えます。大きく二つに分けて考えたいと思えます。一つ目はマクロの問題の視点、二つ目はミクロの視点という二つの視点で考えてみたいと思えます。

環境と福祉というのは、それぞれ21世紀の最大のテーマだろうと思えます。それぞれを向上させていかなければいけない問題だろうと思えます。しかし20世紀においては、環境と福祉というのは関係がない、もしくは矛盾するという考え方が一般的でした。これはなぜでしょうか。福祉を向上させるためにはパイを大きくさせなければいけない。パイを大きくするということは、経済成長をどんどんしていかなければいけない。そのために地球というもののある程度犠牲にしなければいけない、という考え方が一般的でした。1960年代当時に、福祉国家というものがある程度犠牲になっても仕方がない、という考えがあったのではないかと考えています。

19世紀にマルサスという経済学者がありますが、あの『人口論』というのは、まさに経済学的に見れば、地球の環境問題を扱った本の一つだろうと思えます。ご案内のように、人口がどんどん増えれば食糧の増産がそれに追いつかない。そしてそのうち地球環境というものが破壊されてしまう。今日的に見れば、マルサスはそのように言ったのだらうと思えます。

そのときにマルサスは、地球という環境を守るためにどのようなことを提案したか。これはあまり有名ではありませんが、『人口論』の中にどう書いてあるかということ、福祉を切り捨てなければいけない。つまり当時あった救貧法、今日の日本という生活保護法のようなものですが、この救貧法を廃止せよと、そして福祉を落とさないと人口問題は解決しない、ということが書いてあり

ました。このように20世紀においては、環境という問題と福祉という問題はトレードオフの関係、矛盾する関係だということが言われていました。

しかし、21世紀においてはそういうことは認められない。当然、環境も福祉もそれぞれ根底においては、人間の心、人間というものを大切に、人間というものを向上させるためには、環境と福祉というものをともに向上させる道を求めなければいけないと思います。

私なりの整理をした図を描いてみました。(図-1参照) 横軸は環境の軸です。右にいけば環境を大切にできる社会、左側は環境を犠牲にしてもいい無頓着な社会です。縦軸は福祉を向上させる社会、下は福祉を無視する社会、もしくは不公平な社会という軸を描いてみました。

われわれ1960年代まで、イギリス、北欧、そして日本も福祉国家ということを経験して、第二次世界大戦後、一貫して求めてきました。そのときの福祉国家の建設の中には、環境というものが視野に入っていませんでした。ですからここに位置するわけです。そして現在の途上国、アフリカを念頭に置いていただければいいと思いますが、アフリカではいわば貧困というものが存在し、そして環境破壊が進んでいるというところではないでしょうか。

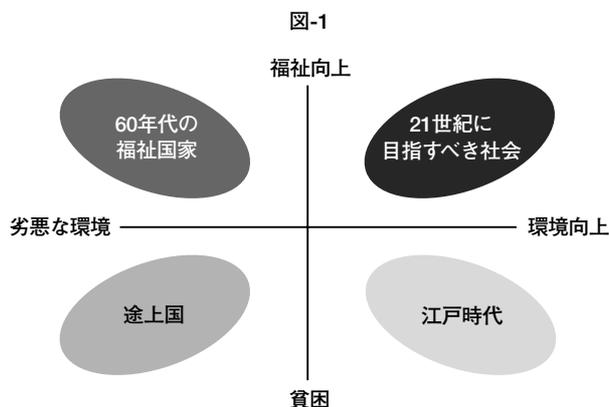
そして環境がある程度守られて、かつ福祉が進んでいない社会はどれか。これは私の独断的ではありますが、江戸時代がそうだったのではないかと思います。江戸時代というのは、意外と循環型社会で、環境というものが大切にされた社会だと、いろいろな本で読みました。そうするとこのあたりに属するのではないかと思います。

しかしこれからの21世紀というのは、第一象限、環境も福祉も大切にされる社会を目指していかなければいけないと思います。しかしこれに対する理論、具体的な方法というものはありません。世界中のどの経済学者も社会学者も政治学者も、どうしたらこのようなことが成り立つのか。20世紀においては矛盾すると思われていた解をどのように解くのか。これが21世紀の課題だと思います。これをぜひ、この環境福祉学会の会員の皆様方の総力の知恵で、回答を見つけていただきたいというのが私の第一の希望です。

第2にはミクロ的な視点です。環境福祉学会の準備会を5月の末に行いました。そうしましたら、いろいろな方からお話を伺いました。自分のやっていることがまさに環境と福祉だとか、こういうことが環境福祉学会で議論できればということを、いろいろな人からご意見を伺ったので大変嬉しかった。このように考えれば、こういういい成果があるのではないかと思います。

人間というものは、ある一つのフレームの中で物事を考えます。漠然と考えているのは物事が見えてきません。いま環境福祉というフレーム、環境福祉という概念、環境福祉という理念で物事を見たとき、いろいろなものが見えてきます。また世の中に、環境と福祉面でたくさん問題を抱えていますし、ニーズもたくさんあります。そのようなニーズを環境福祉という目で見ると、おのずからシーズ(種)、事業の種、行政の種、もしくは解決する政策というものが出てくるわけです。そのようにここ3カ月、4カ月と経験することがありました。

具体的にどのような場面でこのような環境福祉というものが応用可能なのかということを考えてみた場合、いろいろな分野で言えるのではないかと思います。行政、政治のところでも、環境福祉というものが大変有効ではないかと思います。それから公益的



な事業、これは行政が行うわけではなく、NPOや住民の組織が行うような社会的な事業というものもあるでしょう。それから今日もたくさんの企業の方に来ていただいておりますが、環境福祉ビジネスというものはいろいろたくさんあります。これもこの三、四カ月の間に経験したことです。そして当然、学問的な分野、学際的な取り上げ方をして、行わなければならないことがたくさんあるのではないかと思います。

具体的にどのようなことがあるのかということですが、二つに分けて考えるのがいいのではないかと思います。一つは作用としての環境福祉と、もう一つは領域としての環境福祉ということです。作用というのは、環境と福祉が左右にあって、環境が福祉に働きかける、福祉が環境に働きかける、もしくは相互に働きかけるということです。このように考えてみると、思考の順序としてはそれがやりやすいのではないかと思います。

まず環境から福祉に対する働きかけということですが、その代表例はたくさんあります。今日このパネルディスカッションでご報告していただく園芸療法というものも、その典型例ではないかと思います。

同様に最近、千葉県の堂本知事が大変力をいれていらっしゃる、里山療法というものもご紹介します。障害者や高齢者が緑豊かな里山に入ることによって、障害の克服、もしくは治療と改善に役に立っていくということが言われています。森林療法というものも、このグループに入るのだらうと思います。

そのほか、私が関心を持っているのは、登校拒否や閉じこもりをしている青少年の問題があります。そのような方々に対して、環境教育というものが大変効果があるということが言われています。これは私自身が、昨年環境省として試みているのですが、昨年7月1日に長崎市で中学生の12歳の子供が、子供を立体駐車場から突き落とすという事件がありました。その後、佐世保でも同級生をナイフで刺し殺すという事件がありました。子供の心がこんなに痛んでいるのかと考えると、それは自然というもの、環境というものとのふれあいが不足していることも一因ではないかということです。

これについてはすでに、旧文部省の調査で実証的なデータがあります。自然が豊かで、自然とのふれあいが豊かであればあるほど、正義感の強い子になる。人に対する思いやりのある子になる。自然とのふれあいが少ない子はやはり問題を起こしやすい、という調査があります。

そこで自然とのふれあいを持たせる、もっと環境とのふれあいを持たせるような方法、かりに引きこもりをしている、登校拒否

になっているという子に対して、環境教育というものをもっと使えないかということで、東京都の福生市にあるNPO法人青少年自立援助センターというところで試みてもらっています。私のところにとどき、その理事長である工藤さんからお手紙をいただきます。試してみても1年近く経ちます。3年の予定でやっていたけどにしています、かなり効果があったという報告をしてきて、大変嬉しく思っています。

一方、逆に福祉から環境への働きかけというのはどういうものがあるのか、ということです。イギリスの中にあるコミュニティガーデンという試みに、私は大変関心を持っています。これは、始まってまだ10年も経ちません。英国は全体的に非常に自然の豊かなところですが、やはり都市部では公園が少ない、緑が少ないという問題があります。そういう緑を増やすために、高齢者や障害者が積極的に貢献していくということです。これを名づけてコミュニティガーデンと称しています。これがだんだん英国全体に広がっています。これはまさに高齢者のパワー、障害者の社会参加ということで、環境の向上に寄与しているのではないかと思います。

2カ月くらい前に、私がこの環境福祉学というものに関心を持ち始めたときに、神戸市長の矢田さんが、僕のところを訪ねてくれました。矢田さんは昔から一緒に福祉について考えてきた人です。

矢田さんは、「炭谷さん、実は私がいまやっていることも、環境福祉ではないかと思うんです」と言ってくれました。神戸市で今年の6月1日から、神戸市リサイクルセンターというものを始めたと言います。そこに働いてもらう人の一部の25名は、知的障害者の方々であるということでした。これは大変効果がある。これは単に通常の保護された授産所よりも、社会活動として大変効果が出始めているということ言ってくれました。

私が親しくしている桃山学院大学の上野谷加代子先生という方がいらっしゃるんですが、たぶんお知り合いの方もたくさんいらっしゃると思います。彼女が7月の初めに僕のところにビデオテープを1本送ってきました。NHKのBSで放送した番組だということです。上野谷さんのお兄さんは中村ひとしさんという方です。34年前、大阪府立大学大学院を出て、戦後の農業移民のようなたちで奥さんと一緒にブラジルに渡ったということです。そしてブラジルの南部のほうの、クリチバという都市に移住したという話を紹介したビデオでした。

僕はそれを見て感激しました。クリチバという市は、たぶんこの中でも環境をやっている方はご存じの方もいらっしゃると思います。人口160万人くらいの比較的大きな都市ですが、35カ国語がしゃべられているという、大変貧しい町、貧困でスラム街がたくさんある町だと聞いています。

34年前というのは、戦前ではなく最近です。私が役人になったのが35年前ですから、それほど昔ではありません。そこに中村ひとしさんは、日本からクリチバ市に最初農業移民として入りましたが、なかなかうまくいかない。そのうちクリチバ市の職員になることができた。そして公園課長になって環境局長というかたちで昇進していきます。そしてクリチバ市というのは、お聞きすると公園が一つもなかった。それが中村ひとしさんが中心になって、人口一人あたりにすると、いまでは東京の10倍程度の面積の公園を抱えるようになったという、大変環境の優れた町にしたというビデオでした。

その中で環境福祉という面で私の関心を引いたのは、「緑の交換

事業」ということでした。これは何かというと、クリチバ市のたくさんのスラム街においてゴミがたくさんあった。ゴミが乱雑になっていて、ゴミの集積場のようなかたちになっていた。それに対してやった事業は、もし紙や廃プラスチック、金属などの再生可能なものを、たとえば1kg持ってきた場合は、野菜をその2割、だから0.2kgをスラム街の人に渡す。これによってクリチバ市のスラム街はきれいになり、またスラム街の生活水準も向上し始めたという話です。環境も福祉もよくなったということです。

この野菜も、農家で過剰生産になった野菜を買ってきて回したということですから、農民のほうもよくなったという、三つの効果があったと思います。今日目と言えば、環境と福祉もよくなったという例だろうと思います。このように環境と福祉という目で、相互作用というのは、環境から福祉への一方通行の部分もあると思っていたのですが、むしろ相互作用のほうが多いのではないかという感じを持っています。

これもその後、私のところに話をさせていただいた方の事例です。千葉県銚子で仕事をされている方の大変おもしろい事例です。そこでは高齢者に対して農園を分割して、生産活動をやっていただいている。退職後の仕事としてやっていただいているということです。その堆肥は、ホテルや公共施設の残飯を持ってきてやっている。まさに環境事業です。

一方退職後の高齢者の生きがいとしての農業活動もうまく組み合わせてやっている、という事例も教えていただきました。

このように考えてみると、環境と福祉というものを一緒に考えることによって、いろいろ新しい芽が出てくるのではないかと考えています。私は、さらに発展して、環境と福祉が重なり合う領域、そういう環境と福祉がともに重なった領域があるのではないかと思います。そういう領域のビジネス、町おこし、またはそのような公益的な社会事業というものが、これからたくさん生まれてくるのではないかと思います。それによって環境も福祉も豊かになってくるのではないかと考えています。

先ほどお話ししたブラジルのクリチバ市の例もそうですし、銚子市の試みもこれに近いのだらうと思います。さらに最近、福祉の分野でユニバーサルデザインということが言われています。一方環境の分野ではエコデザインというものが言われています。しかし本来望ましいのは、ユニバーサルデザインとエコデザインと一緒に実現する、ユニバーサル・エコデザインではないかと思えます。

私は富山県の高岡という都市の出身ですが、そこにあるタケオカ自動車という小さい町工場の自動車会社があります。そこでは高齢者が使いやすいような小さい自動車をつくっています。これはまさにユニバーサルデザインだと思います。しかし一方、小さいがゆえに燃費もいい。これはエコデザインだと思います。まさにユニバーサル・エコデザインだと思います。そういう目で世の中を見てみると、たくさんのユニバーサル・エコデザインの製品・商品があるのではないかと。これが私という、領域としての環境福祉ではないかと思えます。

このようにして私は、地球環境にも福祉にもいいという大きな問題とともに、小さい地域、において、環境福祉という目で社会が少しずつよくなっていくというものがあればいいのではないかと、強くこの環境福祉学会に期待しているわけです。

皆様方の、いろいろなお批判、ご意見をいただければ幸いです。どうもご清聴ありがとうございました。

## 理事コメント (第1回)

●各理事の方々に本学会への期待や抱負についてコメントを頂きました。数回に分けてご紹介します。

### 環境福祉学会発展のために

久米大学大学院教授 藤田 八暉

「環境福祉学会」は、環境と福祉という21世紀の最重要な課題に果敢に挑戦する学会と言えます。しかし、「環境福祉学」は「学」としては未だ揺籃期にあります。

環境と福祉の分野は、本来は深い関係にあります。行政の分化、学問の専門化が進むにつれて、それぞれ別個に進展してきました。

このため、これから「環境福祉」という概念をどのように構成し、環境福祉学という新しい領域を確立していくかについて歩みながら考えなければなりません。

例えば、これからの高齢化社会において、生活の質(QOL: Quality Of Life)の向上の取組みをいかに進めるか、また、社会的弱者への対応はいかにあるべきかについて環境福祉学の立場から考究し、提示していきたいと思えます。

学会の会員の方のバックグラウンドは広汎と思いますので、研究と実践を重ね相互にフィードバックしながら環境福祉理論の発展を図っていく必要があります。

本学会においては、環境政策学を専門とする立場から、環境福祉学の定立に努めるとともに、学会の発展のために微力を尽くしたいと思います。



### 環境と福祉の両立を目指して

社団法人環境創造研究センター専務理事  
(愛知県地球温暖化防止活動推進センター事務局長)

児玉 剛則

昨年9月の発足シンポジウムで障害者を対象とした「環境福祉雇用」についてお話させていただいたことがきっかけとなり、先日、作業所の方々と話し合う機会がありました。

その際、炭谷アドバイザーがお話になられた『公

害の初期には環境と福祉が密接な関係をもっていた』ことをご紹介しますと、意外に思われる方が多数おられました。これからは、「環境」と「福祉」とが共に充足される社会の実現に向けた試みを具体化するための一助として、京都議定書が発効するこの機会を活用し、誰もがその影響から逃れられない地球温暖化を防止するための種々の活動と福祉が両立するような取組をしてみたいと考えております。



### 環境福祉学会の今後について

子育て環境改善の視点から…

東京成徳短期大学助教授 寺田 清美

子どもを取り巻く環境の変化から、子どもの発達の異変が次々に報じられ、子育ての環境悪化と、低下を続ける出生率(平成15年1.29)に強い危機感を抱いております。

厚生労働省委託研究によると、我が子で初めて赤ちゃんを抱く・オムツを替える女性は87.7%・困った時に誰にも子どもを預けられない母親は42.9%と報告されており、「地域での支えあいの子育て」の希薄化を感じます。

私は、赤ちゃんと触れ合う授業も小・中・高校生に3年間継続中ですが、子ども達は『命の尊厳や自

己肯定感の学び』を、母親は『育児への自信』を、スタッフは『地域でのつながり強化の重要性』を感じ、それぞれが交流することの大切さを実感しています。そこで、誰もが安心して子どもを生み育てることの出来る環境改善の必要性を提案します。

自然や人を愛し、自己肯定感を持てる子を育成すること、母親が生み育てられるような仕組み作りをすること、これらは私たちの大切な役割です。

環境福祉学会の今後は、未来を担う子どもたちの幸福を願って、新しい環境福祉を創造していくための具体策を次世代支援を考慮しながら提案し、それを実現可能にしていくことかと考えます。



## 環境福祉学会の展望について

副会長 企画委員長  
創造学園大学学長

小池 大哲

環境福祉という言葉は、21世紀のキーワードになると確信しています。「環境」と「福祉」の融合という壮大なテーマをもとに、具体的には炭谷茂環境事務次官が、

- (1) 環境福祉のまちづくり
- (2) 環境福祉ビジネスの育成
- (3) 環境福祉コーディネーター（呼称はこれから決める予定）の養成を提唱されておられます。

この具体的な実践の為には、産・官・学の三位一体の協力が不可欠です。

平成17年1月19日(水)の企画委員会の中で、会員数を3年計画で1000名（法人を含む）を目標にするこ

とになりました。

また、学会活動としても研究誌の発表、総会を毎年充実させ、かつ、実践的学会として育成していこうということになりました。

創造学園大学は、ソーシャルワーク学部（社会福祉）、創造芸術学部を併設する日本で唯一の大学として、環境新聞社と共に事務局体制を支えていく所存です。

これからは若い世代が興味を引かれるようなまちづくり、言葉を変えれば若い世代が自主的に参加したくなるようなまちづくりが必要です。

今、若者達の視点は間違いなく「環境福祉」に向いているのを感じています。「環境福祉」という言葉の現代性と緊急性を検証していくのが、私達の責任ではないかと思うのです。



## 環境福祉学会発足に寄せて

環境新聞社社長 波田 幸夫

弊社は、環境問題を切り口とする「環境新聞」及び高齢者福祉社会を構築する「シルバー新報」を発行しており、今年が創立40周年になります。

かつて関係の深かった環境と福祉の分野は、現在は行政、学問の分野でそれぞれ個別に活動するようになりました。今回の環境福祉学会設立を機に、両

者を一体的に取り組むことで、統合した領域で理解を深めると共に、環境と福祉という新しい展開が創出できることに期待したいと思います。

今後は、環境と福祉の関係の認識を深め、現在の閉塞した社会を打開するよい知恵が出て来て、将来世代のための礎を築く方向性が見えるように尽力したいと思います。



### ■ 環境福祉学会組織及び役員一覧

会 長	江草 安彦	社会福祉法人旭川荘理事長／川崎医療福祉大学名誉学長
副 会 長	鴨下 重彦	社会福祉法人賛育会 賛育会病院院長／東京大学名誉教授
	小池 大哲	創造学園大学学長
	伊藤 達雄	名古屋産業大学学長
理 事	松寿 庶	社会福祉法人全国社会福祉協議会常務理事
	波田 幸夫	環境新聞社社長／社団法人日本専門新聞協会理事長
	長田 逸平	日本経済団体連合会地域政策グループ長
	藤田 八暉	久留米大学教授
	土井 康晴	生活福祉研究機構専務理事
	泉谷 直木	アサヒビール株式会社常務取締役
	安川 緑	旭川医科大学医学部看護学科講師
	児玉 剛則	社団法人環境創造研究センター専務理事
	寺田 清美	東京成徳短期大学助教授
監 事	永井 伸一	獨協中学・高等学校校長／獨協医科大学名誉教授
	平野 寛	日本柔整専門学校校長／杏林大学名誉教授
アドバイザー	炭谷 茂	環境事務次官
事 務 局	小内 栄	創造学園大学事務長
	小峰 且也	環境新聞社常務取締役
	酒井 剛	環境新聞社事業部係長

### 事務局 だより

遅くなりましたが、やっとニュースレター第1号が完成しました。

その中で、ご案内しております事例研究会についてですが、今後とも定期的に開催したいと考えております。

第二回目以降で、事例研究会での発表をご希望される会員の方がいらっしゃいましたら、事務局までご連絡下さい。企画委員会にて内容を確認の上、発表をお願いしたいと思います。発表内容は、随時ニュースレターにて概要を紹介し、詳細については、学会誌或いは事例集的な出版物にまとめて紹介したいと考えております。

なお、学会誌については、3月中に発行予定をしておりますので、論文のご投稿をお待ちしております。

今後とも、会員各位のご支援をお願い申し上げます。